

西周と「美妙学説」

岩崎 允胤

まえがき

—西周と中華全国日本哲学会、1987年・年会について—

I 西周の美学研究

II 「美妙学説」

1 美醜を弁ずる人間社会の元素（構成要素）

—あわせて道徳・法律の要素との相互交渉について—

2 美妙学の要素とはどういうものか

—我と物、すなわち主体と客体について—

3 外部の要素のあり方

—「異同成文」などについて—

4 内部の要素のありかた

——情、[利害にたいする]無関心としての美などについて——

キーワード：美醜、我と物、想像力、抽象力、異同成分（弁証法）

まえがき

——西周と中華全国日本哲学会、1987年・年会について——

西周（1829-97年）は、幕末から明治にわたって幅広く活動し、西欧の哲学・法学をはじめとする諸学の導入につとめた啓蒙的な哲学者・思想家であり、漢学の素養を生かして、「哲学」という訳語をはじめ、西欧の多くの哲学用語に対応する日本の学術用語をつくった人としてとくに有名である。

中国でも、西周は、日本の近代化のために尽力した哲学者として高く評価されている。去る1987（昭和62）年8月22-25日には、北京郊外にある愛智山荘で、中華全国日本哲学会1987年・年会が開催され、日本から、わたくしを含めた四名が招待された。この年会の主題は、「日本『近代哲学の父』西周逝世九十周年と唯物論哲学者永田広志逝世四十周年」を記念するものであった。

* かれの作った哲学概念は、哲学、概念、想像力、推論、命題、実体、属性、演繹、帰納、理性、悟性、感性、主観、客観、総合、分析など多数にのぼり、これらは、今日中国でも使われている。

** 拙稿「訪華観感」、中国社会科学院哲学研究所編『中国哲学年鑑・1988年』中国大百科全書出版社、1988年、468-472ページ、を参照されたい。

第1日は、次の4つの記念報告から始まった。

吉田傑俊「近代日本哲学の先駆、西周」

崔 新京「西周の哲学思想を論ず」

岩崎允胤「永田広志とマルクス主義哲学」

王 守華「永田広志の哲学貢献」

* そのあと、この年会で、日本からの参加者は現代日本の思想・文化状況について次の報告をおこなった。

岩崎允胤「反核・平和と現代の倫理」

吉田傑俊「現代日本の思想状況」

碓井敏正「現代日本の非理性主義の潮流」

吉田千秋「現代日本の文化矛盾——文化主

体の形成にかんして——」

西周の多面的な啓蒙活動のなかでかれの美学研究についてはあまり知られていないが、多忙な多方面での活動のなかで綴った「美妙学説」は、かれがその領域を専門とはしていないにもかかわらず、西欧の美学説をよくこなしたうえで、日本や東洋の例に照らして考察しており、なかなかの力量を示すものであると思う。わたくしは、以下で、現代の哲学的価値論と美学・芸術論の視点にたって、西周のこの論稿の先駆的な意義を考えてみたいと思う。

I 西周の美学研究

西周の「美妙学説」の執筆時期は、明治10(1877)年前後と思われる。ほぼ49歳の頃である。この論作は長く草稿のままにとどまり世に流布することはなかったけれども、わが国で最も早く、美学について、西洋の思想をかなりよく熟し、要領よくまとめたものとして意義がある。ファイン・アーツはすでに明治6年に「美術」と訳されている(後述)が、西周は、美術が、道徳・法律とともに人間社会とその文明の重要な構成契機をなすという考えをもって、国の未来への期待をこめて考察していることがうかがえる。

西周の美学への関心は、明治3年、私塾育英社ではじめた講義「百学連環」の覚書中にまずみられる。その第二編「殊別学」(Particular Science)の第一「心理上学」(Intellectual Science)の二「哲学」中に、その6として「佳趣論」(Aesthetics)という一項目がある。これは10行ほどのごく簡単なメモである。かれはそのなかで「古昔希臘ノ時ヨリ此論ハアルコト」

とし、^{ピュアティフル}「卓美之学」とし、独人アレクサンダー・バウムガルテン(1714-1762)の名をあげている。周知のように、バウムガルテンは、ライプニッツの弟子であるクリスティアン・ヴォルフの学派にぞくし、今日邦語で美学とよばれる学をラテン語でアエステティカ(aesthetica)という名称で創始し、古代ギリシアの頃からすすめられてきた理論的認識の学にたいし、斯学を感性的認識の学(scientia cognitionis sententivae)として規定したのであった。西周はこの人物を斯学の創始者として確認したうえで、知(know)・行(act)・感(feel)の三分に対応して、その目的の極としての真・善・美の別を示し、それぞれに応じて、Logic(致知学)・Ethic(名教学)・Aesthetics(佳趣論)の3つの学名をあげ、さいごに「道同異以テ万物ヲ大成ス」とし、(「天」はルビのような位置に書きこまれており、「道」の言い換え、あるいは説明であろう)、その趣意を英語で「identity diversity」と示している⁽¹⁾。この最後の記述は、大自然が同一と差異との統一として——今日の言葉でいえば、両者の弁証法的な統一として——万物を形成していること、すなわち、この統一が万物生成の理法であることに西周が着目し、「佳趣論」すなわち卓美の学をもこの理をもって深く捉えようとしていることを明らかにするものといえよう。これは注目すべき着眼であると思う。

* 古代ギリシアのプラトン、アリストテレス以来の哲学史の伝統において、学的認識(ἐπιστήμη, scientia, Wissenschaft)といえ、理性的認識こそが重視され、感性的認識はそれよりも下級のものとして軽視されていたのにたいし、バウムガルテンは、感性的認識の学として美(pulchritudo <=Schönheit>)を目的とするアエステティカ

(1)西周全集、第四巻、宗高書房、421ページ。

(Aesthetica) を新たに学として体系立てたのであった⁽²⁾。なお、アエステティカという学名は、ギリシア語で「感覚」「感性」を意味するアイステーシス(αἰσθησις) から作られたもので、西欧では今日もaesthetics, Aesthetik などの用語が使われている。この学名は、直訳では「感性学」となるが、美の研究(もちろん醜も含む)を目的とするというバウムガルテン自身による斯学の内容規定に即して、わが国ではやがて「美学」という訳語が一般に採用されるにいたった。西周は、このメモの時期には「佳趣論」と訳していたのである。

大久保利謙の考証によれば、「美妙学説」は天皇御前演説の草案で、明治10年前後のものと考えられる⁽³⁾。古く明治5年説(麻生義輝)もあったが、わたくしは大久保説によることとする。この時分に早くも西によって美学思想が、この好機を得て、まとまった形で述べられたのである。しかも、西の当時における多方面の領域におよぶ多忙な活動のなかでまとめられたものであって、必ずしもかれのこの領域での長年の研鑽の成果とは思えないにもかかわらず、よく問題の要点をおさえ、西欧のもののたんなる引き写しではなく、あとでみるように、東洋や日本の古典などからの例をたくさんにあげて説明を加え、分かりやすく叙述しており、西周の力量を感じさせる。

* 「美妙学」というのは、「佳趣論」などとともに、aestheticsの邦訳語がまだ定まらない時期でのかれの試みの一端を示すものである。『日本近代思想大系』17『美術』における西周「美妙学説」の解題から次の引用をしておく。『『美学』という用語も中江兆民訳『維氏美学』(明治16-17年、維氏とはフランスのE・ヴェロンのこと)によって最終的には統一されるが、西周の訳語は『善美

学』から『佳趣論』となり、さらにここに収めた草稿のように『美妙学』となっている(兆民訳と同時期の坪内逍遙は『美学』であるが、その後も森鷗外、大西祝^{はじめ}、島村抱月、留学前の大塚保治などは『審美学』の名で論議していた)⁽⁴⁾。

II 「美妙学説」

「美妙学説」は4つの部分から成る。つまり、全体を4回に分けて、若干の時日を隔てて論述したものである。論述するにあたって、当初から、構想をかなりよくたてていたことはいうまでもないが、机に向かって一論文を書きあげるさいのように、全体を十分に展望したうえで筆を執り、そのまま一気に展開したものようにはなっていない。つまり、回を重ねるうちにおのずから若干の発展というか、よりよい表現を択んだというか、多少の改良とみられるところもあるようである。

さて、冒頭でかれはいう、「哲学ノ一種ニ美妙学ト云アリ。是所謂美術ト相通ジテ其元理〔原理〕ヲ窮ムル者ナリ」(3ページ⁽⁵⁾)。ここでfine art(s)の訳語として「美術」というタームがかれによっても使われているのが分かる。また、元理(原理)を窮めるものとして「窮理」という儒学の用語がここで生きていることがうかがえる(「窮める」という意味では今日にまで繋がっていると思う、たとえば、学の蘊奥を窮める、とかいわれる)。

* 明治6年のウィーン万国博覧会に明治政府が積極的に参加したさいに作った同博覧会の規約(訳文)中に、展覧会への出品のための次の文がある(傍点筆者)。

(2) A. G. Baumgarten, Texte zur Grundlegung der Ästhetik, Lateinisch-Deutsch, 1983, S. 79.

(3) 西周全集、第一巻、解説の670ページ。

(4) 日本近代思想大系『美術』岩波書店、1989年、2ページ。

(5) 以下、「美妙学説」のテキストとして前注の書物を用いる。引用のページは、本文中に丸括弧内に示した。なお、頭注に負うところがある。

美術（西洋ニテ音楽、画学、像ヲ作ル術、詩学等ヲ美術ト云フ）ノ（博覧場）ヲ工作ノ為ニ用フル事。

此博覧場ノ利益ニ依テ人民ノ好尚ヲ盛美ニシ、且術業ノ理ニ明カナルコトヲ著スベシ⁽⁶⁾。

この訳文中にみられる「美術」の語は、本邦での「この語の初出」とされ、この箇所は『『美術』概念の受容＝形成の起点を示す史料としても重要である』といわれる。なお、「ウィーン万国博で日本の工芸品は好評を博し、これ以後、美術工芸品は有力な輸出品と目されるにいたった」とのことである⁽⁷⁾。

西周は、本稿のなかで、美学上の次の4つの論点について論じている。

1 美醜を弁ずる人間社会の元素（構成要素） ——あわせて道徳・法律の要素との相互交渉について——

(1)、西によれば、人の性にはまず道徳の性がある、善悪正邪を分別する作用をなすが、さらにこの正の枝別として正義の感覚がある。この2つは、人間の社会を成すのに不可欠な元素（要素）であり、古来、この二元素の由来を論ずることは哲学の本体をなしており、人間の世においてこれでいちおう万事万行尽きるようでもあるが、しかもなお一要素がのこっている。それが美妙学の、美醜を弁ずるという要素である。かれはいう、「道徳上ニテ善悪を弁ジ、法律上ニテ正不正ヲ弁ズル〔人間社会の〕元素ノ外、尚美醜ヲ弁ズルト云フ一元素、人性上ニ存スルナリ。然ルニ此ノ美醜ヲ弁ズル元素モ、人間僅カニ野蕃ノ域ヲ離ルルヨリ、夙ニ既ニ社会上ニ顕ハレ、大イナル響動〔影響〕ヲ作セリ」と。たとえば、中国の古伝説上の女帝である女媧が鳳鳴を聞いて笙を作り、帝舜が五絃の

琴に依って南風の詩をつくり、わが国でも、太古に天鈿女命の神楽、素盞雄尊の三十一言の歌がある。このように「僅カ人間社会ノ道立ツニ至レバ既ニ直チニ此元素ノ萌芽ヲ発出スルヲ觀ルナリ」（4ページ、なおここで「記紀」の伝えをかれが「人間社会」の事とみていることに留意したい。すでに白石は「神は人なり」と主張していた。また、同時代には田口卯吉の『日本開化小史』でのすすんだ見解がある）。

* 「元素」というのはこの頃 principle の訳語として用いられた。構成要素あるいはたんに要素という意味である（この原語はもちろん原理という意味をもつ）。田口卯吉『日本開化小史』にも「元素」という訳語がみえる。以下本稿では、引用の場合を除いて、「要素」とする。今日では「元素」はおおむね化学元素の意味で使われる。なお、原語としては、要素、元素の意味をもつ element がある。ギリシア・ローマ系統では $\alpha\rho\chi\eta \rightarrow principium \rightarrow principle$, $\sigma\tau\omicron\iota\chi\epsilon\iota\omicron\nu \rightarrow elementum \rightarrow element$ となる。

** 「南風之詩」は『史記』の次の有名な箇所に出る。「彈五絃之琴、歌南風之詩、而天下治。詩曰、『南風之薰兮、可以解吾民之慍兮、南風之時兮、可以阜吾民之財兮。』時景星出卿雲興。百工相和而歌曰、『卿雲爛兮、禮綬綬、日月光華、旦復旦兮。』」これは朗々と愛誦するに足るみごとな詩文であろう。またわが『古事記』に出る素盞雄尊（須佐之男命）の歌、「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を⁽⁸⁾」。これは、八岐大蛇（八俣遠呂智）を退治した素盞雄尊が櫛名田比賣と婚を通ずるために新宮を作ったときに詠んだ歌とされ、韻律の重疊によって、短いながらに和やかな莊重さをあらわす、文学的香りの高い古歌である。

以上、西は、人の性から論をおこし、遠い昔から、人間の社会生活のなかで道徳・法律の要素とともに、美妙の要素の欠かせないものであ

(6)「ウィーン万国博覧会列品分類」、前掲『美術』404ページ。

(7)同上書、403ページ。

(8)新漢文大系『史記』明治書院、および日本古典文学大系1『古事記祝詞』岩波書店、1958年、89ページ。

たことに注意を寄せている。

つづいて(2)、西は、美妙学は音楽ばかりでなく、もっと広い領域にかかわるのであり、「西洋ニテ現今美術ノ中ニ数フルハ画^{ペインティング}学、彫^{スカルプチュール}像^{スカルプチュール}術、彫^{エングレービング}刻^{アルキテクト}術、工匠術〔建築術〕ナレド、猶是ニ〔より広く〕詩歌、散文、音楽、又漢土ニテハ書モ此類ニテ、其美妙学ノ元理〔原理〕ノ適当スル者トシ、猶延^ひイテハ舞樂、演劇ノ類ニモ及ブベシ」という。美術ないし芸術は、このように多数のジャンルを含む。ここで書を含めているのは妥当であり、わが国には、古代から空海、^{たちばなのはやなり}橘逸勢をはじめ名書家があり、山水画では書は詩・画と統一して、独自の名作を残している。また、われわれは今日、アラビア文字がみごとな芸術作品を生んでいることを知っている。

西周は上にあげた諸ジャンルが「実用の学術」（われわれの言葉でいえば、生活・生産の技術ともいえよう）と相表裏することを指摘し、しかしだからといってこれと相制克・相競合するものではないとし、「実用ノ学術ト雖ドモ、其盛ナルヲ極^{きはむ}ルニ至リテハ、即チ発シテ此〔美妙学の〕元理ノ発越スル〔実用の域の外へこの原理が発出して相対的に自立する〕ニ至ルコト疑ナシ」（4ページ）と西はいう。この点について、たしかにわれわれも、中国・朝鮮・日本のすぐれた陶器の例をただちに想起することができる。また、もと隠栖^{いんせい}のために作られた住居が風雪を経、そのまま環境と相和して後世卓越した芸術品となる、たとえば祇王寺などの例もある。また、そもそも、芸術的でもあることを同時に考えて実用の事物が作られてもいる（たとえば、旧帝国ホテル、ノートル・ダム礼拝堂、スペイン・ガウディの建築、またわが国の民家の趣向のある住宅など）。西の指摘するように、実用と芸術との相互関係は、今日われわれが芸術を考えるさいの重要な一つの論点を

なしているといえよう（芸術が生活・生産を基盤とするものであることがこのことでも分かる）。

また(3)、美妙学の元理（原理）は——もちろんそれは芸術にかかわるものであるとしても——、広く「今日人間社会ノ日用〔日常茶飯の来往の間〕ニ顕ハルル」（4ページ）事でもある、と西はいう。たとえば、君子人の場合、たとえ生来の醜美はどうであれ、おのずから顔色容貌に温順さと厳肅さとが備わってくるし、小人の場合には、どんなに美麗であれ、おのずから卑しく、愚鈍であったり、荒々しくみえたりする。これは「内ニ蘊^{うん}スル所発越シテ外ニ見ハルル」故にである。今日も、顔^{かお}容^{かたち}はよくても人間としてのたしなみを欠き、自らの品位をおとしめているような女性もいるだろう。このように、西によれば、人間の内なる気象は容貌や威儀〔行儀作法〕に表見するものだが、事業についても、また後世に遺るものについても、同様なことがいえる。たとえば、『論語』によれば、孔子が舜の作った音楽を評して美を尽くし善を尽くしているといい、周の武王の作った音楽については、美を尽くしているがまだ善を尽くしていないと評したが、このように内なる気象はおのずから音曲、詠歌、舞踏のさいにも現われる。「況ヤ詩ヲ賦シ歌ヲ読ミ書ヲ作ル如キニ至リテハ、其内ニ含蓄スルノ気象言外ニ表ハレ筆法ニ発スル」ものであり、「心正シケレバ筆正シトイフコト、亦人ヲ欺カザルニ似タリ。」美妙学の要素は、それ自身の領域にとどまるのではなく、やがては人間社会の道德や法にも渉ることにもなる。このようにして総体として人文、社会の文明が形成されることになる。西周は総括して次のようにいう、「畢竟此美妙学ノ元素ノ人間社会ヘ発シテ、カノ道德ノ元素ト経維ヲ相^{あひな}為^なシ、以テ人文ヲ組織スルハ誣^しユ〔無視する〕可ラザル者ナリ。」「美妙学ノ元素ト道德^{ならびに}并^{なら}法

律ノ学ト相関係シテ、社会ノ文明ヲ成ス所以」、あるいはまた「美妙学ト云フ者、道德ノ学、法律ノ学ト相関渉シテ、其元素ハ各自ニ別ナリト雖ドモ、相^{てい}抵^{てい}悟^{てい}スル〔くいちがう〕者ニ非ズシテ、相^{しん}参^{しん}伍^ごシテ〔いりまじって〕以テ此人文ヲ組織スルコト」(5 ページ)等、三者の複雑で多様な相互交渉、相互浸透の関係を西はくりかえして述べ、今日の用語でいえば、社会の上部構造のこれらの構成要素を含みこんで人間社会の人文、文明を総体的に考察する視点を提示するのである。

2 美妙学の要素とはどういうものか

——我と物、すなわち主体と客体について——

西周は、次に「美妙学説 其二」で、いよいよ美妙学自身の本論に入って次のようにいう。「此ノ美妙学ノ元素ハ之ヲ^{わかち}別^{わかち}テニト為ス。其一ハ物ニ存スルノ元素トシ、其一ハ我ニ存スルノ元素トス。物ニ存スルノ元素ハ、即チ物ノ美麗ニシテ我が意ニ適スル所ニシテ、我ニ存スルノ元素ト云フハ吾人ノ想像力^{わかち}是ナリ。」すなわち、さきに述べた美妙学の元素(要素)がさらにここでこのような二つの元素に分かれるとする。「故ニ美妙学ノ理法^{きき}ニテハ、向^{むか}〔先方〕ニ在ル物固^{もと}ヨリ其美妙ヲ具ヘザル可^{べか}ラズシテ、又我ニ存スルノ想像^{こゑ}之ヲ助ケテ感受セザル可^たラズ。仮令^{たと}ヘバ今名画幅アリト雖ドモ、我ニ感受ノ性無キ時ハ、唯墨ト画ノ具ヲ塗抹シタル絹地若クハ唐紙^{とうし}アルヲ見テ其他〔つまり画家の固有の美的価値がそこに対象化されていること〕ヲ見ザルナリ。然ルニ一たび感受ノ性具ハルニ至テハ、一抹ノ墨画ニモ〔そこに対象化されている美的価値を感受して〕風味アルヲ覺エ、〔また〕一句ノ辞〔文字ないし音声から成ることば〕ニモ趣キアルヲ覺ユルナリ」(6 ページ)。

いま引用した文章は、それとしてはいちおう

分かりやすい。しかし、そこからいくつかの論点を取りあげて考えることができる。そこで、しばらく立ちいった論議をすすめたい。もっとも、西周がどこまで問題性について自覚的であったかはわからない。もちろん、自覚的であったかもしれない。

まず(1)、西は美妙学の要素はさらに二つの要素に分かれるとして、物に存する要素と我に存する要素とを分けている。物と我、そなわち今日でいえば、客体と主体の区別によって美妙学を考えようとするのである(これは認識論の場合と同様であろう)。ところで、右の文章は、後述するような微妙な問題性をもつ表現を含んではいるが、その点はいちおうあと(2)にゆずって、——そしてかれは美意識というタームを使っていないが、主体が客体において美を感受するさいの意識を美意識とよぶとすれば——、名画幅をみるさきの例からも分かるように、美意識が生ずるには、そもそも眼前にある名画幅をみなければ始まらない。すなわち、客体の存在が意識成立の前提である。そして美意識を生ずる原由が何らか客体のうちに存在していなければならない、とかれは考えるであろう。しかも、眼による映像があっても、猫や豚の場合には、美意識は生じない。客体のうちに存在するといまいった何らかの美意識の原由も、これらの動物の場合には何らその結果をもたらさない。だが、ここでまず、いうまでもないかもしれないが、とにかく眼前に(客観的に、つまり当の意識から独立に)名画幅があり、人間たる主体がそれをみることによって、美意識の生ずることを西は承認している。むろん、これを否定すれば、パークリーの“esse est percipi”(存在するとは知覚されることである)との主観的観念論に墮することになる。西はむろんこの見地をとらない。

それでは、(2)客体のうちにあつて美意識を生ずる原由となるものは何か？ かれは「物ニ存スルノ元素ハ、即チ物ノ美麗ニシテ我が意ニ適スル所ニシテ」と書いている。ここに問題がおきるのは、美しいし美がそれ自身として(per se)客体のなかに存在するのか、という点である(これは、色の場合、赤、黄そのものが客体のなかに存在するのか、という問題とかなりよく類似している)。西のいうところを、もしそのまま単純に直接的に受けとり、一つの解釈をしようとすれば、物のうちに美麗がそれ自身存在しているとき、それを反映するのが美意識である、ということにもなるであろう。もしそのように解釈するとすれば、西の見解は素朴に客観主義的であるということになるであろう。

ここでの問題を次にたちいって説明しよう。ただし、事柄をなるべく簡単にすませるように努力しよう。日没をみて美と感ずるとき、美は日没のうちにそれ自身存在しているのか。それでは人類の発生以前から、美を感ずる主体がいなくても、美はそれ自身客観的に存在しているのか。雷龍や恐竜はただそれを感じしないだけなのか。地球上に生物が発生する以前から美は存在しているのか。いや、人類が労働をする生活のなかで美的感性が発達して、日没の美を発見——創造的に発見した——のではないのか。日没のうちに美がそれ自身永遠の昔からあるのではなく、主体の発達した感性を触発して、そこに美と感じられるような何らか物質的な原由が日没のうちに存在しているのではないか。名画の場合には、すでに書家がある美を画板のうちに対象的に創造している(他の鑑賞者の美意識をひきおこす物質的な原由となるべきものを画面に作り出しており、そのかぎりでは美は人間にとつ

てそこに定在しているといえよう)。しかし、日没の場合にも名画の場合にも、人間はそれについて美意識を生ずるにしても、主体の感受力の如何によって生ずるところの美意識の深さ、豊かさは千差万別である。ともあれ、いずれの場合にも、客体の単純な反映というわけではない(創造的な反映がおこなわれているといえよう)。

ところで、近代化のすすんだ今日では、われわれの周囲には、天地の大自然をのぞけば、人間の行為、実践を何らか媒介していないようなものはほとんど存在していない。ほとんどのものが、人間の何らかの価値意識をもつての行為、ないしはその成果なのである。わたくしはこのような周囲の世界を「価値的なものの、あるいは簡単に価値的な、対象的世界」と呼んでいる(プラス価値とマイナス価値を含めて)。そして、このように定在し対象化されている(プラスあるいはマイナスの)価値的なものに人間は価値的に多様な仕方でかかわるのである。

* 分かりやすい一例をあげよう。核兵器が人類にとって脅威となっているのがマイナス価値的な対象世界の現状であり、核兵器廃絶のたたかいはプラス価値的な対象世界の創出をめざすものである。これが核兵器をめぐるわれわれの対象的世界である。

それゆえ、価値の一種としての美についていえば、美ないし美麗が人間を抜きにしてそれ自身として客体のうちに存在しているのではない。

* 今日、美学上で一つの論争点となっているのは、美ないし美麗はどこにあるのか、という問題である。美がそれ自身客体の例に存するとするのが客観主義、美は主体の側に(とくに感情・情緒として)あるとするのが主観主義¹であり、これらに反対するのが、主体と客体との関係の

なかにあるとする説である。すなわち美は、それ自身としてどこかにあるのではなく、主体と客体との相互関係、相互作用においてはじめて成立する。もちろん客体の側にその基礎（さきに物質的な原由といったもの）がなければならぬが、主体の働きがなければ、その主導性を抜きにしては、美は成立しえない、と考える。わたくしはこのいわば主体・客体関係説をとる。↑これ（さきに述べた主観主義）は美学上の主観的観念論といえよう。

ただし、主体・客体関係説において大きな見解のわかれがあるかもしれない。価値的なものの対象化を認めるのと、それを認めない見解との岐れである。価値的なものの対象的世界の説を、わたくしは提示する。価値的なものの対象的世界は、われわれをとりまく客観的世界である。——なお、カントが『実践理性批判』で「わが上なる星の煌めく天とわが内なる道德律⁽⁹⁾」といったのも、広義には、価値的なものの対象的世界としてである、ということができる。もちろん、この場合には、星の煌めく天がそれ自体としては人間の手を介しない自然物であることは明らかであるが、しかしこの言葉のなかには、カントの磨かれた感情的、精神的、実践的な感覚による崇高な価値づけが表出されているといえよう。のみならず、それ自身が、人類の歴史の成果なのである⁽¹⁰⁾。

西の叙述は、素朴に客観主義的であるという解釈をいдкаせるような表現をのこしているかもしれないが、かれは、客体の側にそれ自身として美が存在し、主体がこれをそのまま反映するという皮相的で機械論的な理解をここであえて唱えているのではない。さきの引用文には「物ニ存スルノ元素ハ、即チ物ノ美麗ニシテ我が意ニ適スル所ニシテ、〔他方〕我ニ存スルノ元素ト云フハ吾人ノ想像力はナリ。」とある。我すなわち主体の側についてはあらためて後述するとしても、いまここですぐいえることとし

て、想像力は無限に自由に飛翔する力をさえもっているものであり、想像力が機械論的なプロセスを越えて働くものであることは明らかであろう。だが、ここではまず、客体の側について考えておくこととしよう。そこで「物ノ美麗ニシテ我が意ニ適スル所」をひとまとめにして考えよう。すなわち、まず「美麗」であって、だからして次に「我が〔主体の〕意ニ適スル所」というように、この句を切断して読むのではなく、美麗ということで、あるいは美麗として我が意に適する所、とかりに読もう。意に適するとは適意であり、ドイツ語では、wohlgefallenであろうが、このようにひとまとめにして読めば、客体が美として感受される可能性（原由）をもつものとして外界にあり、そういう意味で主体の「意に適する所」としてあり、客体からの何らかの触発をうけて主体の主導的な働きかけによってその可能性が実現する、と解することができるであろう。そして、そのさい主体の想像力の働きが本質的に大きい役割を果たすとされるのである。

そこで次に(3)、我すなわち主体の側についてあらためて考えよう。さきの引用にたちかえろう。かれは「我ニ存スルノ元素ト云フハ吾人ノ想像力はナリ。故ニ美妙学ノ理論ニテハ、^{きき}同ニ在ル物〔価値的（美的）な対象的世界の事物〕固ヨリ其美妙ヲ具ヘザル可ラズシテ、又我ニ存スルノ想像之ヲ助ケテ感受セザル可カラズ」という。すなわち、たんに外的な美妙をそのまま機械論的に感受するのではなく想像力の働きがよく発揮されてはじめて、美妙をわがものとして感受し、そのことによって主体は美的に感動することができるとするのである。ここに可能性の実現がある。しかも、想像力の働き如何によっ

(9) カント『実践理性批判』、岩波文庫、波多野精一・

宮本和吉、篠田英雄訳、317ページ。訳文はことなる。

て、等しく人間であっても、美の感受の如何、その深さ、豊かさは千差万別となる。だからして、客体に単純に美しいし美がそれ自身として、いわばでんと存在するとしたうえで、それにはたいし人間があとから外的にたちむかうというような硬直した考えを、もともと西はもっていないと思えるのである。そういうところには想像力が発揮しようがないからである。さきに述べたように、「物ノ美麗ニシテ我が意ニ適スル所」という句についても、想像力の働き如何によって千差万別の実現可能性をもつものとして理解しなければならないと思うのは、このためである。

次に、西は、人間と禽獣とはこの点でどう違うかについて考える。まず、「此外部ニ属スル元素ハ、禽獣ト雖ドモ少シク之ヲ感受スルノ性アリト見ユレドモ、内部ニ具ハル想像ノ受性ニ至リテハ、全ク欠ケタリト見ユルナリ」(6 ページ)といちおう書くが、しかし、それでは法や道德の要素も動物の性のなかにまったく欠けているかどうかを考え、百獣もその権内に邪魔物が^{かん}闖入するとみずから守ろうとするところがあり、また、雌雄牝牡は愛し合いその児を養育するなどをみると、かれらといえども僅かながらも法や道德の要素をそなえているように思われるとし、そこから美妙を感受する要素についても、動物にもいくばくかは存するのを発見しうるのであろうという。たとえば孔雀はみずからその美麗に誇りをもち、もし^{ぼろ}を着けた者がその近くにゆくと憤怒の象^{しやう}を現わすなどの例をあげる。このように動物にも美妙を感受する性はきわめて微であるとはいえ、欠けてはいないとする。

かく述べたうえで、西は、人間の感受力の問題にもどって、次のようにいう。「人ニ至リテ

ハ、此ノ美妙学上ノ内部ノ元素夙ニ開発スル者ニシテ、物ノ美醜淨穢ヲ分ツ性ハ既ニ稍言語ヲ解スル小兒ニ於テ見ルベキノミニ非ズ、其小兒ノ時ニ既ニ想像力ノ開発アルヲ見ルナリ。譬ヘバ今名画ノ牡丹アリトモ、蝶ヨリ見レバ画ニシテ、真ノ牡丹ト間違ヘ其蜜ヲ吸ハント是ニ止ルハ稀ナルベシ。……然ルニ小兒ノ既ニ言語ヲ解スルニ至リタル者ハ、鐘馗ヤ若クハ鬼ノ画ヲ見タラバ、極メテ名画ナラズトモ、必ズ恐懼畏怖ノ心ヲ生ジ、甚シキハ啼泣スルニ至ルベシ」(7~8 ページ)。また、小兒がやがて筆墨を弄するようになると必ず画を書くが、その画は十文字の頭^{かしら}に団子^{だんご}のような円い形を描いて人というし、巧みに描いた場合でもせいぜい京雛の形以上のものではない。「然ルニ是既ニ想像力ノ開発ヲ徴スルニ足りテ、人ハ十ノ字ノ如ク両側ニ手アリテ、下部ニ足アリ、上部ニ団子ノ如キ円キ頭^{かしら}ラアリト思フニテ、嘗テ〔けっして〕其実体^{いかん}ノ何如ニ関スルコト無シ。是人ニハ少シク生長ノ時ニ至レバ即チ想像力ノ開発ヲ見ル証拠ナリ」(8 ページ)。このように、西は、すでにあいていど言語を解する小兒が対象の実体^{じたい}抜きに画を描いたり画に或種の感動を催すことを指摘し、そこに想像力のかなりの開発をみている。かれが言語力と想像力との発達を相関的発展的にとらえて、美妙学の当面の問題を解決しようとしていることに注目したい。しかも、次にみるように、西は抽象力の発達を想像力の根幹に考えている。そして、抽象力のうえに発達する想像力が人間の生活に無限の働きを及ぼしていることを指摘する。「既ニ人ノ言語ト云フ者、多クハ夫ノ抽象力ト云ヒテ、此ノ想像力ノ本元ヨリ成リ立ツコト多シ。譬ヘバ綺麗ナリト云ヒ汚穢ナリト云フモ、皆抽象力ニテ拙キ取リタル形容ニテ、其実綺麗ト汚穢トハ、何ヲ以テ綺麗ナリヤ、何ヲ以テ汚穢ナリヤト云ヘバ、之

ヲ捕捉シテ、是ゾ綺麗ノ実質ナル、是ゾ汚穢ノ実質ナルト云フ者無シ。総テ抽象上ノ言語ハ皆此ノ如クニシテ、孔子ヲ解剖シテ見テモ孔子ノ体中ニ仁ト云フ所ハ無ク、又盜跖ヲ解剖シテモ盜跖ノ体中ニ不義不道ノ跡モ無シ。……鰭ノ頭モ神ト観ズレバ禍福ヲナス様ニ思ハル。総テ此人間上ニ抽象力ノ一等進ミタル想像力ト云フ者ノ道德上并ニ美妙学上ニ働クハ無限ナル者ニシテ、斯ヨリシテ伯夷ノ作レル粟ハ清浄ナリト思ヒ、盜跖ガ作レル粟ハ穢ナシト思フ、皆此力ノ働キナリ」(8 ページ)。

3 外部の要素のあり方

——「異同成文」などについて——

「美妙学説 其三」にすすもう。美妙学上の外部の要素は、格物学すなわち自然科学ないし物理学の場合のように、吾人の耳目鼻口(舌)覚(皮膚)の五官をとおして我(主体)に現われるが、そのうち耳目の二官がとくに際立っている、と西はいう。たとえば、飲食の楽しみは、飲食する者だけがその楽を享けるが、音楽は、自分で楽器をひかないでも、耳をとおしてその楽しみを覚えらるるからである(もっとも、西はここで大槓に述べており、蘭の花園などではひとは共通に香りを楽しむことができるだろう)。五官はどれもその作用の理は一つであるけれども、なかでも「耳目二官ノ享楽〔その際立っているところ〕ハ一時ニ衆人共ニ同ジク享有スルヲ得ル所ニ在リ」。だが、この点は措くことにして、五官すべてに通ずる次の重要な論点にただちに入る。

美妙学の要素としては、「此五官ヲ通ジテ共ニ具ハル所ノ一大元素アリ、名ケテ異同成文ト云フ」。すなわち前述の「百学連環」覚書中の「佳趣論」における「同異以テ万物ヲ生成」の思想がここで登場する。西周は書く、「凡テ天

地間万物ノ文章〔あや模様、すなわち多様多彩〕アルハ、異中ニ同アリ、同中ニ異アルヨリ起生ス。」「苟モ異ニシテ異ニ偏スレバ、所謂不規則ニシテ尤モ惡ム可ク厭フ可キノ極トシ、又同ニシテ同ニ偏スレバ、規律ニ合フト雖ドモ、亦倦厭ヲ生ジテ人ヲシテ堪ユ可ラザルニ至ラシム。故ニ文章〔西周自身注して「アヤ模様」という〕趣味ノ生ズル所ハ、異中ニ同有リ、同中ニ異アリテ、其異同愈々精微ナレバ、其巧妙愈々高シトス。是美妙学ノ外部ノ元素ニシテ、事物一々其証アリ」。たとえば、天然物、木葉、花卉、鳥の羽などみなそうで、鱗はとくに異形である。道路など、平坦なのが最上であるが、平坦で真直ぐな道が三十里も続けば、そこを行く人間は、必ず厭きてくる。「又詩歌ノ如キ、殊ニ千篇一律ト云フ如キ、何時モ同ジ起リニシテ同ジ結ビ方ナルハ尤モ厭フ所ニシテ、所謂千変百出ト謂フ如ク、同ジ〔和歌の〕三十一言、〔漢詩の作法における〕同ジ平仄、起承転合ニテモ、奇変アリテ趣向各異ナレバ愛スベシトス。是同中ニ異アルヲ欲スル所ナリ。然ラバトテ、詩ナリ歌ナリーモ規則に合スルコト無ク、唯意ニ従ヒ之ヲ賦セバ、固ヨリ詩歌ノ体ヲ成サズシテ、道路モ險惡極マリ、右折左曲攀縁シテ〔攀じて〕絶壁ニ登ルガ如キハ、固ヨリ道路アリト謂フ可ラザルナリ。是必ズ異中ニハ同有テ、斉整ノ意ハ欠ク可ラザル所以ナリ」(9 ページ)。

さらに五官についていえば、たとえば、「耳ノ音ニ於ケル同一ノ音調、同一ノ間歇〔一定の時間をおいて音が生じたり消えたりする〕ハ聴クニ堪エズ。必ず高低アリ、間歇ノ緩急アリ、七音即チド、レ、ミ、ファ、ソル、ラ、シー……ノハルモノニ応音、又他ノ最低音ヨリ頓に最高音ニ移ル等ノ曲調、始メテ聴クベシトス。況ヤ又、金石〔鐘や磬などの楽器〕、糸竹〔琴や笛のたぐいの楽器〕、匏土〔瓠で作った楽器と土で作った楽器〕、草木

〔革を張って作った楽器と木で作った楽器〕等ノ固
有各異ナル音声ヲ合奏シテ其異ヲ取ルト雖ドモ、
間ニ調子即チ律呂ニ於テ必ず其和同ヲ表セシム
ルガ如キ、皆同中ニ異アルヲ貴ブナリ。」また
目と色との関係でも、色の結びつきのさまざま
な例をあげて、一方において、「同類ノ者ハ相
出合ハズシテ、異類ノ者ハ尤モ目ヲ悦バシムル
者タリ」としながら、他方において、「色ノ和
ヲ求ムルハ、必ず異中ニ於テ相匹敵スル者タル
ベシ。是異中ニ同ヲ要スル所以ナリ」(10ペー
ジ)という。

五官中の際立った耳目以外の三官についても
「古来ヨリ未ダ學術上ノ講究ニ上ラザレバ、其
何如ヲ論ズルニ由無シト雖ドモ、必ず如^{かくのごとく}此ノ
理アルコト疑ナシ」とし、おそらく自分の体験
をもとにして、次のように書く。「今試ミニロ
ノ味ニ於ケルヲ論ズレバ、厚味〔濃厚〕ナル物
ハ必ず淡薄若クハ辛烈〔ひりりと辛い〕ナル者
ト出合フコト明カニシテ、鰻^{うなぎ}、鯉ノ蒲焼ニ山
椒ノ加味ヲ要シ、鯛ノ海潮煮ニ胡椒ヲ要シ、
或ハ食後満腹ノ後ニ淡薄ナル沢庵類ノ漬物ヲ要
スルガ如キ、皆淡濃相和スルノ証ナリ。故ニ洋
食ノ肉類ヲ多用ユル者ニハ其飲料ニ苦キ麦酒
若クハ酸キ葡萄酒ヲ要シ、日本食ノ淡薄ナルニ
ハ醇烈〔芳醇〕ナル日本酒ヲ要スルガ如キモ、
淡濃相和スルヲ要シ、異中ニ同ヲ求メ、同中ニ
異ヲ求ムルノ一元理ニ出デズ。然ルニ此元理ヲ、
カノ美術上ノ図画、彫刻、音楽、詩歌ニ徴スル
ハ、猶許多ノ解説ヲ要スベシ」(11ページ)。

このようにして、西は美学上の外部の要素に
ついての説明を終えるが、かれはなんとも事細
かにさまざまな例をあげて異同成文を考えてい
る、とわたくしは思う。さいごの味覚の説明な
どもなかなか面白い。かれがもし美学の研究を
もっと深めたならば、図画、彫刻、音楽、詩歌、
さらに文学、演劇、舞踊などの諸ジャンルにつ

いても定めし興味ぶかい「異同成文」の弁証法
を述べたことであろうと思われる。

4 内部の要素のありかた

——情、〔利害にたいする〕無関心として
の美などについて——

さいごに、「美妙学説 其四」で内部の要素
の考察に移る。

(1) まず、西周は書く、「美妙学ノ内部ノ元
素ト云フハ即チ人ノ情ニテ、此情ヲ助クルニ夫
ノ〔前述の〕想像力ヲ以テシテ感動已ム能ハザ
ルニ至ラシムル者ナリ」と。ところで、およそ
人の性情を形容する言葉はいわゆるクシキの語
であって、たとえば善シ、悪シ、怜ユシ、憎シ、
嬉シ、楽シ、悦バシなどがあげられるが、「之
ヲ分析スレバ、〔次のパラグラフでみるように〕
道德〔法律も含まれるだろう〕上ノ情ヲ形容シタ
ル言葉ト美妙学上ノ情ヲ形容シタル言葉トノ差
別アリ」と。さきに、我（主体）の側に存する
要素として「想像力」、あるいは「感受の感性」、
「想像の感性」ともいっているものを、いまの
引用であらためて「人の情」として括り、「此
情ヲ助クルニ〔とくに〕夫ノ想像力を以テシテ
感動已ム能ハザルニ至ラシムル者ナリ」とする。
情とはフィーリング(feeling)であろう。こ
こでは、ざっとフィーリングのうちに、感受、
感性、感情などを含めており、さらに想像力も
いれて考えているのであろう。これらの相互関
係については立ちいって述べていない。

(2) そして西は、前記のクシキの語を分類し
て情に二種あることをひきだす。すなわち、善
し、悪し、怜^{かわ}ゆし、憎しなどは、みな道德上の
情であって、人間のなすこと、おこなうことは、
大方、道德学の領域に入るから、この種類にぞ
くする語はきわめて多い。他方、クシキの語の
なかで美妙学の情を形容するものとして、西は

「面白シ」、「可笑シ」の二語をとりだしてくる。——しかし、私見であるが、なぜ西が、まず、美し、^{うるわ}麗し、等々の語をあげないのか分からない。また、なぜ、さきにあげた、楽し、悦ばしをあげないのかもよく分からない。なお、クシキの語には関係のない美学的な用語もたくさんにあらう（もののあわれ、わび、さびなど）。むろん西周がそのことを知らないわけではないが、ここでは考察を上述の活用の語に限っている。

ともあれ、さきの二種の情は何によって起るのか。これらの情が、美妙学の原理に合致する外部の（客体側の）要素によって触発されるのはもとよりであるが、そのさい、西は、主体の内部における想像的感性の働きによって生ずる感情の発露についての次の考察をする。「此〔面白し、可笑しの〕二語ハ何ヲ以テ美妙学上ノ情ヲ徴スル言葉タリヤト云フニ、〔仏教でいう〕喜怒哀楽愛惡欲ノ七情ナドノ如キ、己ノ利害得失ト相関シテ発スル者ニ非ザレバナリ」。つまりそれらの感情が己が利害得失と無関係であることに西は着目する。たしかに、^{おのれ}己の物となり己れの欲を充たすものが得られれば喜の情をおこし、己の^{にく}惡み^{いと}厭うものにたいしては己に害になるとみて怒の情を発するのは、ひとの常であるが、「今面白シ可笑シト云フ情ニ至リテハ、唯其物ヲ面白シト^み視、其物ヲ可笑シト^み視ルマデニテ、固ヨリ己ガ利害ニ関スルニ非ズ」（12ページ）。また、そのような情は善惡の判断にもかかわらない。およそ「美妙学上ノ情ハ、^{いやく}苟も意ニ関渉セザシバ〔利害得失にかかわらないから〕全ク是非ノ外ニ在ル者ナリ」（13ページ）と。この指摘は重要であると思う。

* 「美は一切の関心にかかわりなく我々に快いも

のでなければならない」というカントの有名な命題がある⁽¹⁰⁾。

(3) さらに西は、さきに述べた「異同成文」がここでも成りたつことを指摘する。「此二ツノ情ノ由テ生ズル所以ハ、前ニ云ヒシ加ク外部ノ元素ニシテ、何物ニテモ面白シト思ハシムル者ハ、同中ニ異アリ異中に同アリ、規則ノ中ニ変化アリ変化ノ中に規則アリ、齊々〔揃って整っている〕ノ中に^{しんし}参差〔不揃い〕アリ参差ノ中ニ齊整アリト云フ一理に出デザルコト莫シ。」

また可笑しという情のおこる原由について、西は、先哲もいろいろ説をたてているもののまだ定説もないようだが、そのなかで取るべき説と思うのは、いま述べた、規則のなかに変化ありということ、つまり、事物が規則に合いよく^{ととの}齊って続いているところに意外な変化が起こったとき、可笑しという情が発するというのである。「譬ヘバ極メテ^(マジメ)真目ニテ衣服ナドモ正シク威儀堂堂ト進ミ出タル時、突然誤テ^{つま}躓ヅキ^{たふ}仆ルルコト有ルナド、或ハ数十人ノ人整列シテ通過スル時、脊ノ^{なげ}長、格向マデ能ク^{かつこう}齊ヒテ推出シタル中ニ^{とびぬ}脱抜ケテ大キナル男有ルナド、或ハ上品ナル道理立チタル談話ノ中ニ、突然ト下卑ナル^わ訣ケモ無キ比譬ナド引キタル時ナドノ如シ。総テ物事ノ能ク齊ヒタル続キノ中ニテ思ヒ掛ケモ無キ変化ノ其中間ニ起リタル時、発スル情ト見エタリ。故ニ^{あらかじ}預メ期シタル事ト^{たび}度^{かさな}重ル事ニハ可笑シキ事無シ。然ルニ此笑ヒト云フ情ハ、性理上ニ於テハ極メテ切要ナル極メテ高上ナル情ニ属シテ、独リ人類ニノミ限リタル事ト見エ、禽獸ニハ此性欠ケタリト見ユ」（13～4ページ）。

(4) 西は、講述の終りに近づき、次のような趣旨を語る。以上に述べた美妙学の内外の原理

(10) カント『判断力批判』岩波文庫、篠田英雄訳、185ページ。

をさらに広く、人間の文物、書画の類、彫刻の類、工匠術（建築術）の類、音楽舞楽の類、詩歌文章の類、器具玩具の類に適用すれば、それぞれのジャンルごとに精微な美学的な論理法則があるはずであるから、とてもとても語り尽くせるものではない、と。

さいごに、西周は、結びとして、まさに明治の初期に当たって、美術という人文の分野が大いに発展して人間世界を向上させてゆく未来を望み、それがこの国の政治や法という社会の領域の展開のなかで宜しき位置を占め相応しい役割を果たしてゆくことを切に期待しながら、次のようにこの論を結んでいる。「抑^もモ美術ノ人文ヲ盛ニシテ、人間ノ世界ヲ高上ナル域ニ進メ

ルハ、固ヨリ言ヲ待タザル所ニシテ、世ノ裁制輔相ニ任ズル者ハ固ヨリ忽略ス可ラザルノ事タリ。然レドモ是^{これ}モ政法上直接ノ目的ニハ非ズシテ政略上間接ノ目的タリ。故ニ歴世各国ノ帝王モ、意ヲ斯^{ここ}ニ注ガレシ例無キニシモ非ズ。畢意美妙学ノ本旨モ、之ヲ道德、法律、又経済学ノ本旨ト相比シテ相抗敵スル者ニ非ズト雖ドモ、其末ニ流レテ一向ニ偏スル〔一つことに偏^{かたよ}る〕時ハ、^{ふたつながら}両^{かならず}相容レザルノ弊無キニ非ズ。故ニ要^{かならず}本末ヲ明カニシ、各^{おのおの}其適度ヲ得ルニ在リ。是ヲ美妙学説ノ畢^{おわり}トス」(14ページ)。

『美妙学説』は、美的感性と文化的教養との豊かな西周の、啓蒙思想家としての面目の躍如たる、好箇の論文にあるということが出来るだろう⁽¹¹⁾。

(11)以上、価値と美の理論については、拙稿「価値論の視点から美と芸術の考察へ」、「反核・平和と民主主義、および人間とその生の尊厳——価値的な対象的世界について——」、拙著『現代の文化・倫理・価値の理論』

大阪経済法科大学出版部、1998年所収、中国版では、王玉樑・岩崎允胤主編『中日価値哲学新論』陝西人民教育出版社、1994年、所収。

